

巻頭言

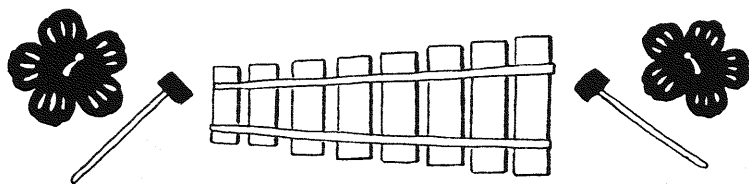
子どもの表現への大人のかかわり方

—音遊びをめぐる二つの場面から—

加藤 富美子

幼稚園の子どもたちと一緒にいると、子どもたちが遊びの中で見せてくれる、計り知ることができない感性や、途轍もない表現力に驚かされることがしばしばあります。小さな子どもだからこそ発揮することができる、新たな対象への新鮮で素直な驚き、その驚きをすぐさま表現できる力。これは、大人になった私たちには決して手にすることができない、小さな子どもならではのすぐれた特性でしょう。そして、このすぐれた特性を、さらに伸ばしてあげることができるのも、あるいはその芽をつんでしまうのも、私たち大人のかかわり方にかかっています。

最近、私たちの幼稚園で見つけることができた、音・音楽をめぐる二つの場面を紹介



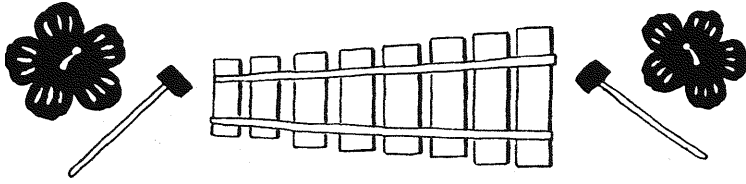
介しながら、子どもの表現への大人のかかり方について、考えていきたいと思えます。

一つ目は、竹を使った遊びの一場面です。附属の農園などから切り出してきた、いろいろな長さのたくさんの竹が外に並べられています。

子どもたちはまず、地面に並べた竹筒をバチで叩いてみていました。ただカチャカチャとバチと竹の表面がぶつかる音がするだけで、音の高さもまったく変わらないし少しも面白くないようでした。ちよつと触ってはすぐに離れていってしまいます。どうすれば、竹筒を響かせることができるかがまったくわからなかったからです。

そこで私がしゃしゃり出て、「長さが違う竹筒を縦にして持って、固い地面にそつと落としてみると、こんなにいろいろな高さの音を出せるよ」と、やってみせてあげました。でも、子どもたちは、竹筒を縦にして地面に打ちつけるという方法に、どうもなじめないようで、一向に興味を示してくれません。

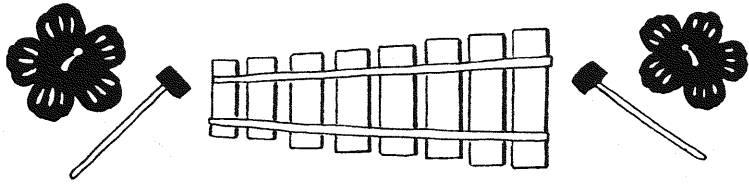
その時、一人の女の子が、「これはね、わたしの音だよ！」と、竹筒を紐で結んで空中に吊るして棒で打ち始めました。体を楽しそうに揺らしながら、一本の竹でいろいろなリズムをずつと打ち続けています。それを見ていたほかの子どもたちも、紐に吊るした竹で、いろいろな音を楽しみ始めました。



さて、二つ目の場面は、インドネシアのバリ島のガムランの楽器で年長さんが遊んだ時のことです。八、九人くらいのグループを六つつくり、一グループごとに大学が所有するガムランの楽器で遊んでみようという計画です。計画では、まずどんな音がするかを、子どもたち自身が好きなように楽器をいじって発見し、その後、グループで「音でお空に虹の橋をかけよう！」と音遊びをしてみようというものでした。

最初のグループで、この計画は見事に失敗ということがわかりました。何もモデルを示さずに楽器を好きなように触るだけでは、ただガンガン、ガチャガチャというすごい音響になってしまい、深いゴングの響きや、きらびやかな鍵盤楽器の音とはかけ離れたものでした。また、みんなで音の虹の橋をつくるために、何か一つ約束事をとって考え、私がカジャールという楽器で等拍を打ち続けたところ、等拍に合わせることはかりに子どもたちの気持ちがいってしまい、生き生きとしたのびやかな音楽とは、かけ離れたものになってしまいました。

そこで、次のグループからは、「ゴングのおへその所をこんな風に静かに打ってみるとどう？」など、楽器の打ち方や、相手の音と音の間に入っていくガムランの合奏の方法を、お手伝いの学生たちと一緒に、モデルとして少しずつ加えてみることにしました。そして、最後のグループがつくり出した虹の音楽の何とすばらしかったこと!! ゴングの静かで深い響きに子どもたち全員がどよめきの声をあげ、またレヨン



という、お鍋を伏せたような形のものを長く一列に並べて音階にした楽器の前に二人で並んだ男の子と女の子は、「相手の音と音の間に入っていく」という手法をしっかりと生かして、見事で、そして一度も聴いたことがないような、すてきなガムランの響きの音空間をつくり出してくれました。

この二つの場面からは、子どもの表現力への大人のかかわり方として、本当に大切なことを教えられます。私が一方的に示した竹の楽器の奏法そのものには関心を示さなかったのに、それを見ていて、自分たちで工夫して生み出した竹の響きにはずっとこだわり続けていくという、子どもたちの素晴らしい表現力。

そして、私が打ち続けた等拍のリズムに合わせようとした合奏は、何とも力のないよんどだような音楽だったのに、ガムラン楽器の響きやガムラン音楽のモデルをちよつと示してあげるだけで、誰も聴いたことのないような、すてきなガムランの音空間をつくり出してしまふ、子どもたちのすごい表現力。

こうした、子どもが備えている表現力を見つけ、それを育てていくために、私たちが手助けできることは何か、私たちがやってはいけないことは何かを、これから一つひとつの場面を大切に考えていきたいなと……。

(東京学芸大学附属幼稚園)